

# 隔離の恐怖

## ——1894年香港のペスト体験

蒲 豊彦

はじめに	299
I 隔離、戸別調査	301
II 中国人社会の反発と流言	304
III 隔離措置の緩和	308
IV 大脱出 (Exodus)	311
V 故郷と香港	315
おわりに	320

### はじめに

---

1894年に広州や香港で大流行の様相をみせたペストは、そののち中国の各地をはじめ、日本、台湾、東南アジア、インド、北アメリカなどへも拡大し、世界的なパンデミックのきっかけとなった。香港では5月から7月にかけて流行し、年末までに2,679人が感染して2,552人が死亡したとされる<sup>(1)</sup>。前年末の香港の人口は約24万人と推定されており<sup>(2)</sup>、人口の1パーセント強が感染し、感染者の約95パーセントが死亡したことになる。被害はとくに中国人居住区に集中した。最初の症例が5月8日に公式に確認されたのち、香港当局は患者の隔離や家屋の戸別調査、消毒等の対策をとるが、中国人住民がそれにはげしく反発し、患者を隠しただけでなく、5月20日には1日1,000人のペースで住民が広州方面へ脱出しはじめた。そしてその背後には、西洋人医師が女性や子どもに危害を加えているという流言があった。そのようななかで、香港の当局も隔離措置を緩和させはじめる。

病気や医療にかかわる中国史研究は、近年とくに中国大陸で活況を呈し、専門書の刊行があいついでいる。たとえば楊念群、曹樹基・李玉尚、張泰山、余新忠そのほか、非常に多い<sup>(3)</sup>。日本では飯島渉が先駆的な研究を行い、小浜正子、福土由紀、ごく最近では帆刈

浩之のものがある<sup>(4)</sup>。これらの研究は、近代にかんしては防疫体制をめぐる制度的研究が基本となるが、楊や帆刈は中国人社会の反応を扱おうとしている。1894年の香港のペストについては、プラット (Jerome J. Platt) らがおもに新聞記事にもとづいてさまざまな側面をほぼ時間順に整理しており、これがもっとも基本的な先行研究である<sup>(5)</sup>。ただし本書は何か特定の主題を論ずるのではなく、年表的な構成をとり、またペスト対策の要として家屋の戸別調査および消毒などに従事した人々の紹介に多くの紙幅が割かれている。それにたいしてシン (Elizabeth Sinn) は、香港の中国人社会を代表する機関であった東華医院にかんする著作のなかで、本医院と当局との対抗関係を主軸に据えながらペスト騒動を描く<sup>(6)</sup>。東華医院は結局、ペスト禍のなかで香港当局の介入を招き、それまで保持してきた自治権を失ったのだった。また最近ではリー (Pui-Tak Lee) が、基本的にはシンの議論をなぞりつつ、東華医院の変化を、西洋医学と中国医学の合流を示すものとしてより広い文脈に位置付けようとした<sup>(7)</sup>。いずれも中国人側の反応がテーマとなっている。

香港でのイギリス人によるペスト対策とそれへの中国人の反応を考える際には、1910年に上海で起こったペストの流行が非常に興味深い。共同租界の工部局が進めようとしたペスト対策とそれにたいする住民の反発、中国人エリートの役割などが、いずれも1894年の香港ときわめてよく似ているのである。上海での流行を中国人エリートではなく民衆や女性に着目して考察した福士由紀は、住民の反発のなかに、「身体や病は、個人的・私的な領域に属するもの」という「中国人社会」の「認識」を読み取ろうとした<sup>(8)</sup>。ただしそれを中国の特質と捉えるのであれば、そのような結びつけ方は慎重でなければならない。なぜなら、インドでも状況がほぼ同じだったからである。イギリス人が飲用水に毒を入れたというわさまで、中国と同じである。インドではこのペストのために1896年から1914年までのあいだに800万人以上が犠牲になったともいわれるが、このときインドの植民地当局が家屋、カーストや宗教、死者の取り扱い、人々の移動の自由などに介入、干渉し、住民から強く反発された。そして研究者はそこに、インド人とヨーロッパ人の価値観の違いや、病気とその治療にたいしてインド人が「世俗的な隔離ではなく、家族の関与や宗教の援助を必要」としていたことなどを、見いだしてきたのだった<sup>(9)</sup>。

1894年の香港のペストは5月上旬に表面化して7月上旬には終息に向い、実質上わずか2ヵ月間のできごとであった。この間に中国人の住民が見せた反応のうちもっとも劇的だったのは、最大で8万人あるいは10万人にも達したとされる香港からの脱出者である。華人人口のみを想定した場合、全人口のおそらく3分の1から2分の1に相当するだろう。1842年にイギリスの植民地となって以来の、限られた期間における最大の人口移動だったと思われる。シンはこのときの大量脱出を、「ペストから逃れようとして去るのではなく、

……香港のペスト対策から逃げようとしたのである」と説明する<sup>(10)</sup>。この要素が大きかったことは間違いない。ところが後述するように、感染地から逃避することは、もともと中国人のもっとも基本的な疫病対処法のひとつなのである。

1894年のペストの流行は、香港の中国人社会を大きく揺り動かすものだったにもかかわらず、このように、住民自体の動向やその意味が十分整理されているとは言いがたい。香港を脱出した大量の住民がその後いつ香港に戻ったのかということさえ、じつは明らかにされていない。本稿は、基本的には福士のように中国人エリートの上に背後にある中国人住民の意識や動向、なかでも大量脱出に焦点をあて、具体的には、ペスト自体および香港当局が導入しようとした隔離や戸別調査といった強制的な制度のなかで、中国人住民がどのような反応を見せ、それが何に由来し、やがて制度と中国人の意識がどのような折り合いを見せるのかを検討する。つまり、近代的な防疫制度がまさに導入されるその瞬間の軋轢を、多少なりとも明らかにしようとするものである。香港のペスト騒動は、おおむねつぎの3段階を経て推移した。当局が隔離や戸別調査、消毒などを進める段階、つづいて中国人の反発の噴出、そして最後が、当局が若干妥協をはじめめる段階である。以下、この順序にしたがって叙述を進める。

## I 隔離、戸別調査

---

患者の隔離や家屋への立ち入り調査など個々人の生活に介入するような疾病対策は1894年に突然始まったのではなく、おもに天然痘対策としておそくとも1860年代には検討されるようになっていた。天然痘の隔離地として使われたのは、九龍半島の西側にあり、現在は大陸と陸続きになっているストーンカッターズ島である。この島はもともと1863年に刑務所（Convict Station）が設置され、禁固12ヵ月以上を言い渡された中国人受刑者がビクトリア刑務所から移送された<sup>(11)</sup>。ただし1867年2月にイギリス海軍のプリンセス・ロイヤル号（*Princess Royal*）が日本から香港にやってきたとき艦内で天然痘の患者が発生し、病院に改装した砲艦や海員病院などのほかに、ストーンカッターズ島の刑務所に収容されたことがあった<sup>(12)</sup>。刑務所でありながら、すでに患者の隔離先としても使われたことがわかる。

1870年12月から71年1月にかけて天然痘が流行しはじめると、感染を防ぐために患者を集中させる必要があり、1月25日にストーンカッターズ島の刑務所の一部を天然痘病院（Small Pox Hospital）とし、これ以降、天然痘の患者はすべて国家医院（Government Civil Hospital）のみで受け入れたのち、ストーンカッターズ島へ移送してここでのみ治療するも

のとされた<sup>(13)</sup>。1883年にいたると香港政庁の諮問機関である潔淨局 (Sanitary Board) が設置され、1894年のペスト流行時の対策を先取りするような公衆衛生条例が提出される。そこでは、入居者が過剰な、または不衛生な家屋は家主を召喚し (第3条)、係官がどのような家にも立ち入って検査をし (第4条)、天然痘をはじめとする伝染病の患者を移動させ (第5条)、患者のいた家屋には消毒、清掃を命じること (第6条)、等々が当局によって可能となり、多くの場合、罰金や禁固刑などの罰則が付されていた<sup>(14)</sup>。

1891年2日には、九龍ドックで病院船ヒュギエア (*Hygeia*、英語ではハイジーア) が進水した。ギリシャ神話に登場する健康の女神の名にちなむこの船は、もともと香港政庁が香港黃埔船塢公司 (Hong Kong and Whampoa Dock Company) に発注して建造した大型船で、長さ185フィート、幅38フィート、700トン。同社のものとしては当時最大の船だった<sup>(15)</sup>。ヒュギエアの完成にともない、天然痘患者の隔離場所としてのストーンカッターズ島は同年10月までに放棄され、病院船ヒュギエアがそれに置き換えられる<sup>(16)</sup>。ストーンカッターズ島は軍用地となり、ヒュギエアは安全のために町から3マイル離れたところ、しかもストーンカッターズ島の風下に停泊することとされた<sup>(17)</sup>。

これらの措置が実施されてから数年ほどして、ペストが香港を襲うことになる。近代広東では、おおむねつぎのような順序でペストが伝播した。1867~1892年が廉州、高州、雷州、瓊州、1894年前後が珠江デルタ地帯、そして1898年前後が潮州地区である。流行が西から東に向かって移動していることがわかる<sup>(18)</sup>。もともと雲南で風土病的に存在していたペストが広西を経由して広東に入ったと推測され、とくにその経由地となったのが、雷州半島西方に位置する港町・北海だったと考えられている。北海は1876年に開港したのち、79年から就航した汽船が85年以降に増加し、さらに91年からは北海、広州間を定期船が通うようになる。60年代以降、この北海と雷州半島が広東でのペストの発源地となる。ここから陸路で広西の梧州方面、海路では海南島、珠江デルタ、廈門、そして90年には広州に伝わった<sup>(19)</sup>。

1894年の2月以降、このペストが広州で大流行のきざしを見せはじめる<sup>(20)</sup>。このころ広州から香港へは平均して週に1万1,000人の入境者があり、もともと人の往来が頻繁だったうえに、この年の3月2日には新年を祝う行進を見るために4万人もの中国人が香港を訪れていたとされる<sup>(21)</sup>。やがて5月8日にいたると最初の症例が公式に確認され、10日には港が汚染されていることを当局が宣言する。翌11日に防疫条例が制定され、患者のヒュギエアへの隔離、患者の報告義務、家屋への立ち入り等々が進められることになった<sup>(22)</sup>。同日、もともと天然痘患者を想定していた隔離用の病院船ヒュギエアがストーンカッターズ島の裏から西角 (現在の西環) 近くに移動し、患者受け入れの準備が整えられた。ヒュ

ギエアの甲板は上下2層の構造で、下層はいろいろな用途に使うことのできる空間となっており、屋根で覆われた上層はさまざまな部屋に分かれていた。まず右前方に医務官の使用する一角があり、そのうしろには広い通路をはさんで左右に部屋が3つずつ並び、それぞれベッドが4つずつ入る。さらにそのうしろに診察室と患者の浴室があり、船尾が看護人と召使いの部屋、そして調理室となる。下層は天窗と窓によって通気が保たれ、上下2層で患者80人を収容することができた<sup>(23)</sup>。

12日には東華医院のペスト患者全員がここに移される。またこの日から潔淨局の調査隊が1軒ごと（house to house）の戸別調査を始め、発見された患者はヒュギエアへ移送され、またその家屋は消毒された<sup>(24)</sup>。しかしヒュギエアがすぐに満員になり、14日にはケネディ・タウン警察署（Kennedy Town Police Station）がさらに専用の病院となる<sup>(25)</sup>。ペスト対策が順調に動き出したとあってよいだろう。ヒュギエアとケネディ・タウン警察署の病院では、いずれも西洋人医師が西洋医学の方法で治療にあたった。

ただし香港政庁のペスト対策の基本は、患者の隔離と家屋の戸別調査（患者および死者の発見と清掃、消毒）の2点である。ホンコン・デイリー・プレス紙（*Hong Kong Daily Press*）が評論のなかで「この病気に対抗するために推奨される方策は患者の隔離と全般的な清掃である」と述べるように<sup>(26)</sup>、当時、これらが対策の中心であることは明確に認識されていた。つまり当局は感染を拡大させないことに精力を集中したのだが、ペストの治療法はもちろんのこと、病気発生の原因さえ不明だった当時においては、これはそれなりに合理的なものだろう。

ここで当時のペストの治療法を確認しておきたい。在香港日本領事からの「黒死病」発生の連絡を受けて日本の『官報』が掲載したペストの概略には、「療法は対症療法その他未だ詳ならず」<sup>(27)</sup>、また北里柴三郎の助手としてともに香港でペスト菌の調査にあたった石神亨も、「本病の療法は単に対証的（マツ）にして……」<sup>(28)</sup>、当時は西洋医学も対症療法に頼るのみで、腫れたリンパ節の切開のほか、ブランディーやシャンパンなどの「気付け薬」をあたえ、水で熱を取り、石炭酸で「血液の毒」を追い出すなどの手立てしかなかった。この時期にあっては、西洋のペスト治療法は効果の面では中国のものと大差なかったとされる<sup>(29)</sup>。

ヒュギエアでは具体的にどのような治療が施されたのかを、すこし見ておこう。1894年のペスト流行に際して日本政府は北里柴三郎、のちに東京帝国大学医科大学校長となる青山胤通、かれらの助手の石神亨、宮本叔らを香港に派遣した。一行は6月12日に香港へ到着し、14日からペスト菌の研究に取りかかるが、29日には青山が、すぐ続いて石神がペストに感染していることが判明し、いずれもヒュギエアに移された。この時の青山の体

温が105°F (40°C)、30日の夕方までには石神も同じ体温に上昇した。かれらについての医療記録によれば、2人はヒュギエエアでつぎのような治療を受けた。まず青山は、体温を下げるために濡らしたスポンジを30分ごとに使い、牛乳、卵、ブランズ・エッセンス (Brand's essence、一種の栄養スープ)、少量のブランディーとカロメル (Calomel、甘汞、塩化第一水銀、下剤として用いる) をすぐにあたえ、さらに2時間ごとに重炭酸アンモニウム (Ammonium Carbonate、消化剤)、キニーネ・チンキ剤 (Tinctura Cinchona、解熱剤)、ジギタリス浸出液 (Infusion of Digitalis、強心剤)、クロロホルム水溶液 (Aqua Chloroform) を投与された。石神の場合は、アンモニア、キニーネ、スポンジによる解熱、一臭化樟脳 (Monobromated camphor) を4時間ごとに、また栄養のある食物としてエッグ・フリップ (Egg Flip、卵酒のようなもの)、ブランズ・エッセンス、牛肉のスープ (Beef Tea) があたえられた<sup>(30)</sup>。現在は、初期の段階であればストレプトマイシンやテトラサイクリンなどの抗生物質で治療することができるが、当時は解熱剤と強心剤、消化の良い食物、そして病室を清潔に保ち、通気を良くすることなどによって手当をしようとしたのだった。青山と石神はその後回復して、日本に帰国した。

ここで19世紀末の中国側の療法を見ておくと、ちょうどこの少し前に、中国で現存最古のペスト治療の専門書とされる『鼠疫彙編』が広東省で出版された (1891年初版)。本書はペストを、「天地の戾気、濁気」が「熱毒」となり、ネズミをへて人の血管に入り、その流れを塞いで引き起こされるもの、という。そして治療薬として石灰の白虎湯、大黃、厚木、枳実などを主成分とする承氣湯、カモシカやサイの角を使う羚羊湯などを処方する。いずれも解熱剤である。ほかに瀉血を勧めている。『鼠疫彙編』はまた予防策として、庭や部屋を掃き清め、厨房や溝は清潔を保ち、窓を開けて風を通すなど、衛生面にも注意を喚起している<sup>(31)</sup>。志賀市子によれば、ペストの流行時に扶鸞によって下された「神方」も、その薬効を検討すると、けっして薬名をいい加減に並べたようなものではないという<sup>(32)</sup>。さらに、ペスト菌によって腫れあがったリンパ腺を切開するという、一種の外科手術も行われた<sup>(33)</sup>。

しかしいずれも決定的なものではなく、当時にあつては、結局は隔離や戸別調査によって流行の拡大を防ぐことが、それなりに有効なほとんど唯一のペスト対策だったと思われる。

## II 中国人社会の反発と流言

病院船ヒュギエエアへの隔離については、当初からすでに中国人エリートが懸念を示し、5月10日に開かれた潔淨局の委員会で委員の何啓が、「やはり陸地に場所を作るべきで、

人々はヒュギエエアに行くことに反対するだろう」と述べた。これにたいして国家病院の院長代理だったローソン (James A. Lowson) が、「あなたや中国人の指導者たちもヒュギエエアに行ってみれば、患者の一人一人に看護人がつくことに満足するでしょう。人々がそこへ行きたがらないとは思えません」。「もしかれらがヒュギエエアを見れば、そこへ行くでしょう」と反論した<sup>(34)</sup>。衛生的であり、よく管理されている点もその理由となっていた。結局、ヒュギエエアが投入されることになる。

さて潔浄局の会議で何啓がヒュギエエアによる隔離に反対した翌日の5月11日には、前述のようにヒュギエエアが香港島の西角沖に移動した。さらに12日には家屋の戸別調査が始まり、そこで発見された患者21名と東華医院のペスト患者約40名全員がヒュギエエアへ移送されることになる。このとき東華医院の董事局が、「ヒュギエエアに乗船させられることによって患者が親族から引き離される」として、医院の患者の移送に強く反対した。しかし議論のすえに董事局側が承諾する<sup>(35)</sup>。14日までには、家屋調査で発見された患者をひとまず東華医院に送り、ペストであることが確認されるとヒュギエエアに移されるようになった<sup>(36)</sup>。このように東華医院は入院患者の移送に応じ、また当局側も方法を若干変更するが、住民のあいだでは「ヒュギエエアに送られることと、西洋の技術と科学で治療されること」への反感が高まり、19日にはついに家屋調査に支障をきたすにいたる。調査員がやってくると多くの家が戸を閉ざし、石を投げつけ、午後には調査ができなくなってしまったのである。また群衆が保良局に集まって窓を壊した<sup>(37)</sup>。

そして20日には、東華医院の董事局会議が開かれている最中に、潔浄局委員でまたこの会議の議長であった劉国祥 (涓川) の店が襲われたという連絡が入った。さらに劉が家に帰ろうとして建物を出るや暴徒に取り囲まれ、警察に護衛されなければならなかった<sup>(38)</sup>。劉はイギリス寄りと見られていた人物である。西洋人医師にかんする流言が広まっていることに香港当局が気付くのも、この20日だった。東華医院のこのときの会議には警務司 (Captain Superintendent of Police) のメイ (Francis H. May) が同席しており、「この病気にかかっていない人たちがヒュギエエアやケネディ・タウンの病院に連れて行かれている」といううわさが広がっていることを報告した<sup>(39)</sup>。この5月20日 (日曜日) こそ、流言が本格的に拡散し、1日1,000人のペースで住民が広州へ脱出しはじめ、当局によるその後のペスト対策に大きな影響をあたえることになる特別な日である。この日に感染地域 (おそらく太平山) から流言が広がりはじめ、21日にはそれが湾仔、九龍半島にまで達したとされる。そのために21日から22日にかけて香港の中国人学校では出席者が突然減少した。感染地区では22日の出席率が10~30パーセントで、休校となったところもある。そのうわさはつぎのようなものだった。

- a. 「当局は各学校から小さな子どもを何人かずつ選び、胆汁を取るために肝臓を摘出しようとしている。これがペストを治す唯一の治療法である」
- b. 「係官がすべての学校に赴き、子どもを全員検査し、体に腫れ物や吹き出物があまりない者を病院船ヒュギエアに送る」

この報告を作成した視学官は、このうわさはヨーロッパ人には奇妙に感じられるが、中国では「誤った孝行の奨励」として、病気の治療のために体の肉を切り取ることが実際に行われており、また「腫れ物」(boils) ということばは bubonic plague (腺ペスト) の bubonic から出たのだらうと説明している<sup>(40)</sup>。ただし、一般の中国人は英語を解さなかったと思われるため、bubonic からの連想という解釈には無理があるだらう。

5月上旬から7月上旬にかけてのペスト流行期には、近隣の広州も含めてさまざまうわさが現れたが、その主なものはおおむねつぎのふたつの類型に分けることができる。

- (1) 住民が、隔離病院へあやまって連れて行かれることがある。
- (2) 隔離病院では、西洋人医師が治療ではなく何か恐ろしいことを中国人に行っている。

前者について少し説明しておく、女性をめぐるこのような話があった。「ある中国人女性が、ペストに感染しているとして潔浄局によってヒュギエアに送られた。しかしそれは妊娠だとわかった」。しかし、「その患者の命が手遅れになるまで、その間違いに気づかなかつた」。この話はあるヨーロッパ人が召使いから聞いたものだが、その召使いのうち2人は仕事をやめて香港を去ったという<sup>(41)</sup>。

また6月16日の『アモイ・ニュース』紙 (Amoy News) には、つぎのような記事が見られた。「香港からやってくる中国人は、香港政庁からの扱いにいまだにひどく不平を言っている。昼間寝ている者を Permanent Committee の係官が見つけると、そのかわいそうな者を無理矢理歩かせて監視下に置き、熱病などほかの病気にかかっている〔そうした〕人がしばしば病院に送られてペストの治療を受ける。そして病院に到着して、すでにペストにかかっている人たちと一緒にされる。するとほんとうに感染して死ぬことになり、親にも家族にも二度と会えない」<sup>(42)</sup>。Permanent Committee は、防疫策の執行機関である。この類型のうわさはそれなりの合理性があるだらう。またこの場合、本稿冒頭で紹介した約95パーセントというペストの死亡率の高さも考慮しなければならない。ペストの専門病院からは実質上二度と生きて出られず、そこへ隔離されるということ自体が、死の宣告に等しいのである。そのようなところへ間違つて連れていかれるのはこの上ない恐怖であり、またその可能性がないとはいえなかつた。



『アモイ・ニュース』紙のなかで、「親にも家族にも二度と会えない」という部分も重要である。東華医院の董事局が、「患者が親族から引き離される」としてヒュギエニアへの患者の移送に強く反対したことはさきに紹介したが、潔淨局の委員会でもほかに、「親族や友人が中国人のもとから完全に引き離されて西洋人が管理するヒュギエニアや、やはり西洋人が管理するケネディ・タウンの病院に送られ、しばらくのあいだ消息がまったく途絶えてしまうことを、中国人は快く思わない」と報告された<sup>(43)</sup>。

つぎに、(2)の種類のうわさは、以上のような隔離病院の恐ろしさを別の側面からかさねて強調するものである。5月19日から20日にかけて、つぎのようなうわさも流れていた。「政府は、中国人社会を計画的に破壊するため、ヨーロッパの薬を中国人の全住民ののどに流し込むことを決定した。理由は明らかにされていない。……病院やヒュギエニアの西洋人医師は、患者を全員切り刻み、腎臓その他のぞつとするコレクションを作っている。やはり理由は明らかにされていない」。この記事は続けて、大潭（Tytam）のトンネル工事のときの、「生き埋めにするための中国人の子ども2万人を政府が欲しがっている。理由は神のみぞ知る」といううわさと同じようなものだという<sup>(44)</sup>。香港島の東部中央部に位置する大潭では、1883年から1888年にかけて取水のためのダムが建設されている。そのときの工事のことをいうのだろう。

5月23日までには広州でも、香港には行かないようにと警告するビラが町に貼り出され、「骨と目から薬を作るために〔中国人の〕妻と子どもが外国人の医者に切り刻まれる危険がある」と説明しており、このビラのために広州から香港へ渡る人が大幅に減っているという<sup>(45)</sup>。また、「目がくり抜かれ、妊娠した女性は切り開かれる」というものもあった<sup>(46)</sup>。遠く離れた汕頭でも1894年のうちに、「香港で外国人医師がペストの患者におそろしい扱いをしたというひどいうわさ」が伝わっている<sup>(47)</sup>。西洋人の医者が中国人に、なかでも子どもや女性に恐ろしいことをしているという流言は、遅くとも19世紀のなかごろには発生し、1868年の揚州教案や1870年の天津教案、1891年の長江流域教案など、ことあるごとに繰り返して社会の表面に噴出してきたものである<sup>(48)</sup>。北里柴三郎らが1894年に香港へ派遣されたことはさきに触れたが、病原菌をつきとめるためには遺体の解剖が不可欠だった。ところがこのような流言のなかで解剖を行えば、医者がまさいうわさ通りのことをしていると受け取られかねない。そこでどのように苦労して遺体をこっそり部屋に運び込み、不便な場所で解剖を行ったのか、北里が細かに記録している<sup>(49)</sup>。ここからも当時の流言の大きさをうかがうことができる。

香港当局の防疫措置にたいして、中国人住民は第一に隔離をめぐる流言という形で反応したといえよう。

### Ⅲ 隔離措置の緩和

---

前述のように、こうしたうわさに当局がはじめて気付いて報告したのが、5月20日の東華医院の会議であったと思われる。この日、東華医院は町中につきのような通知を貼り出した。「政府はペスト患者をすべて東華医院の医師に治療させることに合意している。ケネディ・タウンのガラス廠（Glass Works）の所有者とのあいだで、そこに臨時の中国病院を建てる話し合いができています。患者はすべてヒュギエアやケネディ・タウンの〔警察署の〕病院に連れていかれるのではなく、そこ〔ガラス廠〕の病院で中国人医師が治療することになる。……患者は感染が分かっても今ではヒュギエアではなく東華医院の分院〔ガラス廠〕に移されるため、衛生係官が来ても心配する必要はない。病気の患者を隠さないように。また報告しない場合は、関係者が罰せられる」<sup>(50)</sup>。翌21日には実際にケネディ・タウンのガラス廠にペスト病院が開設された。病院船ヒュギエアとケネディ・タウン警察署のふたつは政府の医者と看護婦が管理する一方で、ガラス廠の病院は東華医院の委員会に任せ、植民地医療スタッフ（Colonial Medical Staff）と海軍医（Naval Doctor）の監督のもとで伝統的な中国人医師が働くことになっていた<sup>(51)</sup>。こうして、いずれも香港当局の監督下にあるとはいえ、医療体制が、西洋人医師が担当する病院と中国人医師担当の病院のふたつに整然と分かれることになった。なお青山胤通によれば、ガラス廠の病院はふたつの棟からなり、通路の両側で床のうえにアンペラを敷いて病床とし、患者は布団もなくただそのうえに横になって呻いているものだという<sup>(52)</sup>。このような衛生および管理の欠如も、当局が中国式病院の設置を当初認めなくなかった理由のひとつだった。

病院船ヒュギエアはそもそもわずか80人ほど収容できるのみで、前述のようにすぐに満員になってしまっており、これだけではペストの流行に対応できないことははっきりしていた。そこでケネディ・タウンの警察署が病院に転用されていたのだった。そしてさらに中国医が管理するガラス廠の病院を開設するにいたるわけだが、西洋のやりかたで患者を受け入れようとしていた香港政庁がこのようにあっさり方向転換した理由については、いまのところ史料を確認することができない。しかし、中国人社会からの反発のほかに、前述のような当時の西洋医学の限界を、当局も認識していたのではないと思われる。ヒュギエアと警察署の病院、そして新設のガラス廠の病院は、いずれも患者が病院に隔離されるという点では変わらない。違いは、中国医が中国の在来の方法で治療するのか、それとも西洋医が西洋の方法を用いるのかという点にある。これにかんして、ガラス廠の病院が開設されてヒュギエアへの移送が事実上中止された直後の22日の『ホンコン・デイリー・プレス』紙に、つぎのような注目すべき論説が掲載された。

もしこの病気が西洋の医学によって治療可能で、そして中国人自身には治療不可能なものであるなら、ヨーロッパ人の医者に患者の面倒を見させるよう要求できる理由がいくらかある。しかし、火曜日〔15日〕の昼から日曜日〔20日〕の昼までの5日間にヒュギエイアとケネディ・タウンの〔警察署の〕病院に入った110人の患者のうち、90人が死んでいる。これは、医学的な処置がこの病気にたいしてほとんど効果のないことを示している。中国人は自分たちのやりかたをもう少し信頼しており、……純粋な中国の病院で死亡率がヒュギエイアやケネディ・タウンよりも高いことはありそうにないと、率直に認めてよいだろう。患者を移送するおもな目的は隔離にあり、……。<sup>(53)</sup>

こうして、西洋医学による治療という点では香港当局が妥協することになったが、うわさや中国人の脱出は収まらず、また戸別調査や、すでにヒュギエイアに収容されている中国人患者を玻璃廠病院へ移送する問題などが残っていた。さらに、じつは東華医院の20日の会議のおもな議題は、広州へ行くことを希望する患者を特別な船で届ける案件だった。これは、香港政庁の管理が及ばない中国へ患者を送り出すことであり、隔離政策の根幹にかかわるものである。これにたいして警務司のメイが、広州の官吏が上陸を許さないだろうと報告したが、議長を勤めていた劉渭川が広州へ請願することを提案し、全会一致で承認された<sup>(54)</sup>。

20日には前述のように一般人が1,000人香港から大陸へ船で渡ったのに引き続き、21日も同じ状況で、渡船には太平山地区の下層民がむらがっているという<sup>(55)</sup>。そしてこの21日には、保良局と東華医院の代表30名が、中国人住民の行政上の窓口である華民政務司（Register General's Office）を取り囲み、戸別調査の即時中止、強制隔離の中止、太平山のペスト感染家屋の清掃中止、ヨーロッパ人なしで「中国人に、自分たちの病気に自分たちのやりで対処させること」などを要求し、外国人が自宅に侵入することに中国人は怒っており、「自分たちにかまわないで欲しい」と求めた<sup>(56)</sup>。やはり隔離と戸別調査（清掃、消毒）という香港政庁のペスト対策の根幹をすべて拒否し、さらには、中国人の生活に介入することなく、そのまま好きにさせて欲しいという、きわめて重大な要求をつきつけたのだった。

22日には、東華医院の代表があらためて総督府に出向き、ロビンソン（William Robinson）総督にたいしてつぎのように要請した。(1) 戸別調査を止めること、(2) 患者が故郷に帰るのを許すこと、(3) ヒュギエイアの患者を玻璃廠の病院に移すこと、(4) 患者はすべて玻璃廠の病院に送ること。これらにたいして総督は、(2) については関知しないが、広東の当局に拒否されても干渉はできない、(3) については生命の危険があるため却下、(4)

については、患者は好きな病院へ行くことができるとしつつ、(1) にかんしては「その訪問は絶対に必要である」と明確に拒否した。ただし、女性と子どもには配慮し、損害があれば賠償すると述べた<sup>(57)</sup>。ヒュギエシアに取り残されていた中国人患者は、結局29日に全員が「ケネディ・タウン」（おそらく玻璃廠の病院）に移され、この問題も、中国人側の意向にそって解決することになった。それ以降、ヒュギエシアはヨーロッパ人、日本人、ユーラシア人専用とされた<sup>(58)</sup>。なお、総督は22日（もしくは23日）に、戸別調査、患者と死者の移送、家屋の消毒と清掃に協力し、妨害しないでほしい旨の布告をあらためて出しており<sup>(59)</sup>、患者がかってに故郷に戻ることに同意したのではなかった。また、患者を広州へ移すことについても、実際に許可するのはもう少しのちのことになる。

広州移送問題のその後の進展については後述することとして、ここでは、残る(1) 戸別調査について整理しておく。この調査は、2つの要素からなっていた。ひとつは西洋人の係官が中国人の家屋に立ち入って患者や死者を発見することである。死者が発見されれば専用の埋葬地に送られるとともに、患者は病院へ移送して隔離される。そしてもうひとつの要素は、家屋の清掃と消毒である。こうした戸別調査については、5月20日に開かれた東華医院の董事局会議ですでに、東街（East Street）の住民たちが、「衛生係官が家に突然入ってきて子どもたちを怯えさせる。……配慮すべきだ」という請願を出し<sup>(60)</sup>、翌21日に保良局と東華医院の代表30名が華民政務司を取り囲んだ際も、女性と子どもの問題を取り上げ、「女性の部屋のプライバシーが侵害されていることに不満を表し、兵隊と警察が毎日やってくるために女性と子どもが“怯えており”、女性と子どもにたいして“外国人たち”が邪悪で口にできない企みを持っているのではないかという流言が出はじめている」と指摘していた<sup>(61)</sup>。戸別調査の場合、中国人住民は外国人が屋内に入ること自体を嫌がったのだが、その理由のひとつが病院船ヒュギエシアと同様の、女性と子どもをめぐるうわさであったのである。

戸別調査が実際にどのように行われたのかを、5月26日午前中の差館上街（Upper Station Street）と水巷（Sui Hang Lane）の場合を例にとって具体的に紹介してみよう。ここには家が30軒あったが、半分ほどは無人になってしまっており、1軒平均15分ほどで調査が行われた。調査隊は実際の作業にあたるヨーロッパ人3人に、通訳の中国人巡査と戸口に座っているだけの中国医の計5人である。家は2階建か3階建だが、各階は2層、3層になり、各層は小さな箱状に仕切られている。これが居室である。広さは約3平方メートルで、高さはときには1.5メートル以下。光と空気は外側の鳩の出入り穴（pigeonholes）から届くのみで、ほかは真っ暗である。通路と階段は小人族サイズ（pigmy dimensions）で、調査者はしばしば這って行くことになる。部屋は、板を2枚渡してベッドを作り、上にはマッ

トと毛布、下には名状しがたいさまざまなゴミがある。各階の後ろが調理場となっており、便所としても使われる。むきだしの炉から出る濃い煙が建物に充満する。このような家をランプの明りで調べ、患者や死体があれば記録して警察に知らせ、死体は消毒する。動かせる家具やボロは外へ出し、壁にはすべて漆喰を塗り、大量の石炭酸をかけた<sup>(62)</sup>。

以上、5月20日以降、病院船ヒュギエイアへの隔離や、西洋医学による患者の管理などの面では、香港当局はすこしずつ中国人社会に譲歩したが、戸別調査と清掃、消毒の点ではもとの方針を貫こうとした。

#### IV 大脱出 (Exodus)

---

6月に入ると患者が急増して流行が最盛期を迎え、以前は患者の発生した家のみに行っていた清掃と消毒が、不衛生だと報告されたすべての家に拡大された。さらに、不衛生な住居を封鎖し、感染地区の通りをいくつか塀で囲い込む予防措置がとられる<sup>(63)</sup>。具体的には、つぎのような事態が進行した。まず、ペストの感染地区から退去させられる貧民を収容するために、6月のはじめごろまでに、当局が西角のジャーデン・マセソンの埠頭 (Jardine's Wharf) 近くで倉庫その他の建物をたくさん確保しはじめた<sup>(64)</sup>。そして「ある地区」が封鎖され、そこには家が300軒ほどあったが、7,000人ほどが新しい場所に移動させられ<sup>(65)</sup>、6月16日には新聞がつぎのように伝えた。「この2晩、かわいそうな人たちがたくさん問答無用で家から追い出され、通りで寝るはめに陥っている。収用された全家屋のドアに潔浄局の通告が貼られ、そこには、この通告が貼り出された後24時間以内に居住者は退去すること、とある」<sup>(66)</sup>。もっとも患者が集中したのは貧しい中国人がとくに多く住む香港島西部の太平山区であり、以上の措置もこの地区で行われた。つまり、ペストが最盛期を迎えるなかで、家屋にかんする当局の対策も激しさを増し、中国人の住民はいわば、ペストと衛生措置という二重の災難に見舞われたのだった。

このなかで、植民地香港の側も重大な局面を迎えることになる。中国人住民の脱出が止まず、労働者不足が深刻となり、香港の経済や機能が麻痺しはじめたのである。少し時間を遡って脱出の状況を整理してみよう。1日1,000人が香港を離れはじめているという情報が伝えられたのは、前述のように5月20日のことだった。翌21日には、「広州香港間の汽船に乗る婦女が、清明節で男たちが墓参りに帰るときよりもっと押し寄せており、太平山の妓女のなかにも荷物をまとめて出るものがあった」<sup>(67)</sup>。23日の香港の英字紙が「おもに女性と子ども」が広州へ向かっているというも<sup>(68)</sup>、いずれもうわさの影響だろう。またこのころ「渡船にはいずれも太平山地区の下層民が群がっている」とされ<sup>(69)</sup>、25日までに

は人口の15分の1から10分の1がすでに去ったと見積もられ<sup>(70)</sup>、さきに紹介した5月26日の差館上街と水巷の戸別調査でも、30軒ある建物のうちすでに半分ほどが無人になっており、一般人の脱出が続いた。6月6日までは、中国人が香港を去ったことが貿易や商業、事業に深刻な影響をあたえ、太古（Taikoo）ダムの工事現場では労働者3,000人のうち3分の2が逃げてしまった<sup>(71)</sup>。9日には、この5週間で8万人が去り、依然として毎日3,000～4,000人が香港を離れているという<sup>(72)</sup>。

この9日に、ペスト患者を広州へ向けて送り出すことを、香港当局がようやく承認する。患者の移送については、6月2日までは潔浄局に「治療のために広州もしくは故郷の村へ行くことを希望する中国人患者全員を移送するための委員会」が設置され、食料や看護人を備えた特別船を用意することが計画されていた<sup>(73)</sup>。そして、9日につきのような条件で移送が認められたのだった。

- (1) その患者が警察に届けられていること。
- (2) その患者が病院を経由していること。
- (3) その患者が広州へ行きたいと言っていること。
- (4) その患者が移動に耐えることを医者が証明していること。
- (5) 患者を快適に広州へ送ることができるよう、その船が適切に食料および装備等々を備えていること。

そして14日と15日の2日間にわたって、4隻のジャンクに分乗した170名の患者が広州の善堂の病院（Benevolent Hospital）に送り出された<sup>(74)</sup>。これは、広州のイギリス領事をとおして広州の善堂とのあいだで手配されたものである。そして医療係官の監督のもとで移送が行われた<sup>(75)</sup>。シンも指摘するように、当局のこの条件には（1）（2）によって未届けの患者を捕捉する意図もあったと思われるが<sup>(76)</sup>、この移送は明らかにペストを拡散させることにつながり、隔離政策のさらなる大きな後退だった。

患者の広州移送問題について廈門では、香港政庁がそれを認めないのは、「もし中国人が広州へ行ってしまえば、薬を作るための心臓が手に入らなくなるからである」といううわささえ流れていた<sup>(77)</sup>。隔離、戸別調査、広州移送など、香港政庁の防疫措置のひとつひとつについて、西洋人医師の残虐さという流言が発生したようだ。しかしともかく、6月中旬には患者の移送が始まった。ロビンソン総督は、これによって「人々の憤りを和らげることになる」と期待したという。多くの中国人住民が香港を離れるなかで、中国人社会をこれ以上刺激しないということである。ところが中国人はさらに無条件の譲歩、すなわち

「ペスト患者は、最初に病院へ行く必要もなく、どのような制限も監督も受けず、自分の意志と好みで自由に香港を離れることができるべきだ」と要求しはじめ、つぎのような事態となった。

これはもちろん拒否した。すると中国人は復讐として集団で香港を去った。買弁、請負人、両替屋、商人、召使い、苦力がすべて広範な脱出（Exodus）に加わり、全部で10万人ほどになった。大きな製糖工場は操業を止め、中国人の店はほとんどすべて閉まり、商取引はおおむね停止し、召使いがいなくなって普通の家庭はきわめて不便になった。この時期のビクトリア地区ほど気の滅入る光景は簡単には想像できない。店も家も閉まり、普段はにぎやかで人だかりのしていた大通りで命の気配といえば、ぼつんぼつんと見える独りで歩いている通行人か、あるいは墓地へ運ぶぞっとする積荷を受取りに病院へ向かう運送用の荷馬車のガタガタという音、もしくは汚染された貧民街での不潔な仕事から戻る“清掃”隊の整然とした歩みだけだった。<sup>(78)</sup>

ロビンソンがここで「復讐のために」と書いているため、住民が交渉の手段として「脱出」を使っているようにも見える。これについてはのちほど検討したい。

患者の広州移送後も脱出者の流れは止まらず、「労働者不足のために船舶業界はきわめて困難な状況になっている。汽船は荷役が遅れ、あるいは積荷のスペースを満たすことができない。一方で、留まっている者たちに非常に高い賃金をあたえねばならない。港の貿易にかんしては、状況は日々悪化している」<sup>(79)</sup>、「商店では従業員がいなくなり、カゴ担ぎたちは雇い主に黙って何百人も去り、家庭の召使いたちは広州や本土の家族のもとへ行くために給料を要求した。また中華火車糖局（China Sugar Factory）では300人以上の男たちが九龍に渡り、180マイル離れた汕頭に向かって歩きはじめた」<sup>(80)</sup>。また『東京朝日新聞』もこのころの香港の様子を、「二十二三万人の総居住民殆ど半を残すのみ東洋諸港随一の繁華と聞えたる中央大路も実に寂寥たる有様となれりと」と伝えた<sup>(81)</sup>。

6月末から7月初めにかけての状況を、『ホンコン・デイリー・プレス』紙はさらにつきぎのように描く。

この数週間、船の出入港に応じる通常の労働者供給がきわめて面倒なことになり、深刻な問題となっていたが、最近、事態がさらに悪化した。輸入業の屋台骨ともいえる中層階層の中国人が大勢、実質上店を閉め、この植民地を離れている。業務は放置され、注文書は不運な輸入業者の手元に溜まっている。いまではこの植民地にいない

中国人あてに送られた商品の膨大な在庫が、あちこちに積み上げられ、……。かれらが早く戻って、溜まったものを動かさじはじめないかぎり、どうすればいいのかわからない。ある店では7万ポンド相当の灯油が配達待ちになっており、またべつの代理人は小麦粉の莫大な在庫の処理に困り果てている。……この理由のひとつは、消毒をめぐる当局の高圧的なやり方にたいする、それなりの怒りにあるようだ。……香港九龍碼頭及倉庫有限公司（The Wharf and Godown Company）はここのところ労働者にかんして困難な状況にあり、数少ない残留者に通常のちょうど3倍の給料を払っている。会社の書記が商人に向けて、保管料をトン当たり10セントから38セントに値上げせざるをえなくなるだろうと、通告している。<sup>(82)</sup>

6月14日には広州への患者の移送が始まっていたにもかかわらず、一向に減らない脱出者に加え、おそくとも27日までは荔枝角病院への移送問題が新たに浮上していた。荔枝角はストーンカッターズ島の東北方の対岸に位置する地名で、現在も存在する。ここで香港の割譲史を簡単に振り返っておくと、1842年に香港、1860年に九龍半島がイギリスに割譲されたのち、新界の租借によって現在の香港の領域が出来上がるのが、1898年であった。九龍と中国との境はもともと界限街（Boundary Street）に置かれており、荔枝角はそのすぐ北にある。つまり1894年のペスト流行時には、荔枝角はまだ中国の領土だった。6月23日に、中国側がここに、古い役所を利用してペスト患者の収容病院を開設し、すぐに満員になったが、患者はおもに香港から来ていると考えられた<sup>(83)</sup>。つまりこの時点で、正規の手続きを経て広州へ送り出される患者と、こっそり香港を離れて荔枝角の病院に入る患者の2種類が存在していたことになる。ほかに、まっすぐ故郷へ戻った患者もあったかも知れない。

荔枝角のこの病院は香港にとってきわめて都合の悪いものだった。香港に隣接しているうえに、香港で船舶に供給される水のかかなりの部分が荔枝角で取水されており、荔枝角病院はその河からわずか10メートル足らずの場所にあったのである<sup>(84)</sup>。しかもその病院では見舞客が患者と接触することができ、また深さの足りない墓など埋葬方法にも問題があり、将来に渡って荔枝角がペストの新たな感染源になることが懸念された<sup>(85)</sup>。

6月29日に、「ほとんどの中国人商店の店主が植民地から去ったことによって生じている深刻な事態について協議した」商会（Chamber of Commerce）が<sup>(86)</sup>、従来は実際的な行政にかかわるのは避けてきたにもかかわらず<sup>(87)</sup>、今回は香港政庁を強く批判し、「中国人が望むなら、荔枝角に行かせてやってほしい」と総督に要望する<sup>(88)</sup>。その後、Permanent Committeeの強硬な反対、荔枝角病院への訪問調査などの曲折を経て、最終的には7月13



日の朝から荔枝角へも患者を移送することになった<sup>(89)</sup>。

以上、6月に入ってペストが最盛期を迎えるなかで、香港政庁は隔離にかんしては妥協を繰り返したものの、家屋の清掃、消毒についてはさらに対策を強化した。このような状況下で住民の脱出が止まらず、香港は経済機能の麻痺という重大な危機に直面することになった。

## V 故郷と香港

---

前章ではおもに一般住民の状況を紹介したが、ペスト患者の心情を読み取ることのできる史料も存在する。広州への患者移送が承認された6日以降の埠頭の風景を、ロビンソン総督がつぎのように記録している。

広州やマカオ行きの船が出るさまざまな埠頭で痛ましい光景が見られた。ペスト患者が決められた手続きを経ないで香港を離れないよう、巡査がきびしく見張っていた。乗船地点でそのような大勢の人々を押しとどめるのは、かれらにとって憂鬱な役目だった。この気の毒な犠牲者たちは、故郷の村で死にたいという強い思いにかられ、最後の力をふりしぼって船に乗ろうとするものの、巡査が監視するなかで、埠頭もしくは船の登り口にたどり着いたところで崩れ落ちるものもあった。<sup>(90)</sup>

一般住民も患者も、必死で香港を離れて故郷に帰ろうとしたのである。なにがかれらをそのように突き動かしたのだろうか。この点については、香港の英字紙の解釈はかなり揺れており、当時であっても理由がはっきりしていなかったことがうかがえる。たとえば中華火車糖局についてはさきほど触れたが、『ホンコン・デイリー・プレス』紙は、その労働者の半分が、また Lee Yuen Refinery では全員が工場を離れ、「労働者のほとんどは汕頭の男たちで、ペストのニュースでパニックになり、病气、東華医院そして死を恐れて一団となって立ち去ることにした。多くの場合、当然支払われる給料の残りさえ待たず、汕頭まで陸路を歩いていく」と述べる<sup>(91)</sup>。東華医院さえ恐れ、また給料受け取りの説明がさきほどの記事とは逆になっていることなどはともかくとして、ここでは労働者がペストそのものを恐れたとされる。ところが同紙は翌日の記事で、「住民の多くがこの植民地を離れている。その多くは同じようにペストが猛威をふるっているところ〔広州〕へ行くのであり、ペストではなく、死にかけている人と死んでいる人にたいする政庁の扱い方を恐れているのである」とする<sup>(92)</sup>。香港政庁のペスト対策こそが住民脱出の原因だということである。さ

きに紹介した、住民が「復讐のために」香港を去ったというロビンソン総督の解釈と同じものである。

この記事で「死んでいる人」にたいする扱いというのは埋葬のことだが、そのまえに脱出関連の記事をもう少し見ておくと、荔枝角病院の移送問題にかんして、新聞につきのような評論も出た。「中国人は死の恐怖のなかにあり、また香港での患者の治療にかんして憤っている。そして実質上、住民全体がいっしょになって潔浄局とその係官に対抗しているといえるかもしれない。中国人は自由に荔枝角へ行くだろうが、現在の状態では、患者をこっそりと移すことができるまで、あらゆる手段を使って病気を隠すことになる。こうしてこの病気が香港中に拡散することになる」<sup>(93)</sup>。また香港政庁のペスト対策について、「中国人がこの植民地から逃げ出すのは、おもにふたつの理由からである。中国人の住民の言うことが正しければ、香港政庁が押し付ける埋葬の方式が中国人の強い宗教的心情（迷信といってもいい）を害することと、家庭の守護神を損ない、兵隊のボランティアが手荒なやり方をする戸別調査を、人々には嫌がっているのである」<sup>(94)</sup>。ここにふたたび「埋葬」が現れる。前章で提示した史料およびこれらを総合すると、住民が香港を脱出しようとした理由は、つぎのように整理することができるだろう。それはペスト自体にたいする恐怖心と、香港当局のペスト対策への嫌悪感であり、後者には隔離、戸別調査、埋葬への反感が含まれる。後者のこの3つの問題は、1910年に上海でペストが流行した際、華人エリートたちがとくに協議した課題とびったり一致する<sup>(95)</sup>。

埋葬にかんしてすこし史料を補うと、「ペストの発生から今までに少なくとも中国人の3分の1が大陸へ行ったと推定される。これらの移住者がもっとも恐れているのは、ペストで死んだ場合に石灰といっしょに埋められることである」とされ<sup>(96)</sup>、また香港について広州で、「死者はすべて石灰で満たされた大きな坑に投げ込まれる」といううわさが流布した<sup>(97)</sup>。北里柴三郎や青山胤通らがペスト患者を解剖したとき、遺体を運び込むための棺桶の底には石灰を敷いたと述べており<sup>(98)</sup>、おそらく墓地でも石灰をまぶしながら埋葬したのではないかと思われる。また「〔患者であることが〕見つかると玻璃廠へ送られ、もし死亡すると親族に知らされることなく放り込まれて埋められる。これは死者にたいする中国人の尊敬の念をひどく傷つけるものである」ともいう<sup>(99)</sup>。当時、海外の華人組織の重要な業務のひとつが華僑の遺体を中国に送還することだったのは、いうまでもないだろう。たとえ海外で死亡した場合であっても、遺体は故郷の家族や親族のもとで適切に埋葬されねばならなかった。しかし香港に留まるかぎり、ペストの死者専用の墓地が指定され、また埋葬には家族が関与できず、指定墓地でどのような扱いを受けるのか知るすべもなかった。これが、埠頭まで来て息絶えるほどの患者さえも故郷へと向かわせた、もうひとつの要因

だったと考えられる。

つぎに、ペスト自体への恐怖心と大量脱出との関係について見ておきたい。中国医学がペストにたいして用いる薬や予防策についてはさきに紹介したが、じつは中国人が疫病の際に最初に頼るのは、さまざまな神様だった。1894年のペストの場合、香港でも「ペストの神の怒りを鎮めようとして」しきりに爆竹を鳴らし<sup>(100)</sup>、6月3日の晩に開かれた文武廟の董事会では、陳綏靖伯という神を広東の新寧県から迎え、そのほかの神々とともに通りを巡遊することが決まった。「この神は悪霊を押さえつける力があると信じられている」という<sup>(101)</sup>。この時の巡遊がいつ行われたのかは確認できないが、さらに19日から、陳綏靖伯が「ふたたび文武廟から担ぎ出されて、夜、通りを巡遊しており、3晩続く」という<sup>(102)</sup>。『申報』は広東でのこのような活動を総括して、「今年は粵東で疫病が流行し、民間では神様を迎えて巡遊して疫病を追い払うことができると考え、また改めて年越しをして(改歳過年)、やはり疫病を避けることができると考えているらしい。こうしたことを時折耳にするが、良医を訪ね、招いて、妙薬を精製し、人事を尽くすということは、たえて聞かない」という<sup>(103)</sup>。薬よりもまず神頼みなのであった<sup>(104)</sup>。

ペストが発生したときの中国人の対処法を整理した李玉尚によれば、服薬や神の巡遊などのほかに、「一般的な方法がつまり引越して逃げることであり、秋の終わり以降にようやく元のところに戻り、またこの病気を避けて他郷へ移るものもあった」とする<sup>(105)</sup>。具体例としてはたとえば、汕頭、潮州の近辺では、1901年もしくは02年にペストが流行した時、村や町を捨てて丘のうえに逃げる人々が見られ<sup>(106)</sup>、1894年の香港ペストの際には『ホンコン・デイリー・プレス』紙が、「香港と同様にほとんどの場所で、ペストの出現は人々の脱出の合図である。助かりたいために親族を病床に置いたまま逃げることもある」と指摘している<sup>(107)</sup>。ペストの恐ろしさについては、香港の英字紙が広州の新聞からつぎのような記事を転載している。広州のある家で、一家8人のうち7人までがペストのために1日のうちに亡くなってしまった。娘がひとり残され、家族の棺を買いに行くこともできずに座り込んでいると、強盗が押し入ってきた。すると娘は強盗にいくらか金を渡し、家族のために棺を買ってくれれば、何でも好きなものを持っていってもいいと言う。そこで男は金を預かって家を出たが、戻ってみると娘はもう死んでいた。そこで家のなかの金目のものを集めはじめたところ、にわかに倒れ、そのまま息絶えた<sup>(108)</sup>。『申報』(上海版)5月17日にもほぼ同じ話が載っており、これは、ペストの感染力の強さと死亡までの早さを強調するいわば都市伝説だったのではないかと思われる。また『申報』は同じく広州について、「伝染の多さ、死亡の早さは日ごとに激しくなっており、宴の席がまだ終らないうちに亡くなり、談笑の音が消えるまもなく魂がすでに散ずるのはよくあることで、にわか

に容態が急変し、薬石も用いようがない」<sup>(109)</sup>、「感染すれば立ちどころに死亡し、多くの場合、治療が間に合わない。そこで医者や薬屋はかえって閑散となる」と伝える<sup>(110)</sup>。医学的にはさきにも見たように、劇症の場合3日で死亡するとされているが、いずれにしても治療の時間さえないのであり、このような場合は、条件が許せば感染地から逃げ出すことが、個人で取りうるもっとも効果的なペスト対策だろう。そして香港では、中国人住民の多くが実質上出稼ぎ労働者であり、香港を離れても戻ることのできる故郷があり、脱出はきわめて容易だった。

それでは、住民はなにをきっかけにしてふたたび香港へ帰りはじめたのか。まず、6月21日には「この数日のあいだに多くの労働者がジャンクでこの植民地に戻っている。これは望ましい兆候である。しかし労働者はまだ非常に少なく、高い賃金を払わなければならない」<sup>(111)</sup>、さらに29日には、「ここ数日の統計数値から、ペストが急速に減少していることが明らかである。近いうちに港の疫病終息宣言がなされると考えてよいだろう」と報道された<sup>(112)</sup>。かなりの患者や潜伏期のものが毎日香港を離れているために、統計数値があてにならないものになっていることは、同紙が前日28日の紙面ですでに認めている<sup>(113)</sup>。そこで、29日のペスト減少の記事は、数値が不正確であることを踏まえたうえでのものだろう。ただし、労働者が戻りはじめていとされる6月21日は労働者不足のさなかであり、また荔枝角病院の移送問題さえ始まっていない。そこで高賃金につられて戻った可能性を考えねばならない。住民が本格的に戻りはじめるのは、7月上旬からであり、9日から11日にかけての新聞につきのような記事が繰り返し現れる。「香港を離れた中国人が、この1日、2日のあいだに大勢戻ってきており、かれらは概して、ペストが実際上もう終わったと考えている。1日に100人を超えていた死者が9人に減っていることから考えれば、これはいわれのないことではない。ただ、われわれはまだ完全に危機を脱したとは考えられない」<sup>(114)</sup>、「先週は労働者が大勢戻っており、労働者の問題は緩和されつつある」<sup>(115)</sup>、「広州から戻る中国人が、川蒸気船で香港を離れる人数の2倍になっている」<sup>(116)</sup>。

これにたいして戸別調査や家屋の清掃、消毒は、7月4日に、「太平山の塙に囲まれた地区の消毒が完了したところであり、……」<sup>(117)</sup>、6日には「太平山の汚染地区全域をすべて消毒した」<sup>(118)</sup>、そして21日には、「汚染地区の清掃と消毒の仕事は実質上完了した。戸別調査はもちろん継続することになる」と報道された<sup>(119)</sup>。つまり7月下旬にいたっても戸別調査は終了していないのであり、この点から考えると、香港の中国人住民を恐れさせたペストと戸別調査というふたつの要素のうち、香港脱出にかんしてはペスト自体がより主要な要因だったと思われる。

この時期になってペストが終息した理由については、伍連徳による研究が参考になる。

伍は1911年に中国東北部で肺ペストが大流行したときに中心的人物として活躍した中国人医師であり、イギリスで教育を受けた西洋医である。まず、1894年の香港のペストは、5月上旬に感染が明らかとなり、7月上旬には終息に向かった。伍によれば広州でも、3月に明瞭となって5月に盛行し、そして7月に終息に向かった。ペストはその後も毎年繰り返して発生するが、1895～1909年の香港の場合、2月から4月に始まり、5月6月に盛んになり、8月に収まっていくのが基本的なパターンだった。つまり、香港のような防疫体制を取っても、広州のようにそれがなくても、ペストの発生と終息は同じ経緯をたどるのである。これが、1894年の香港のペストが7月に終わっていった理由である。このパターンについては、ペスト菌を媒介するノミの繁殖状況が関係しているとも考えられるが、伍は結論を出していない。ただ、香港当局の努力がまったく無駄だったかといえば、そうでもなかった。伍は1894年の場合、人口150万人の広州で死者は約7万人と推定する<sup>(120)</sup>。これは人口の約5パーセントにあたる。一方香港では、本稿冒頭で示したように約24万の人口のうち死者は1パーセントほどだった。香港での措置が、この差となって現れた可能性がある。

1894年香港のペスト騒動は、ひとまずこのように終わりを告げることになったが、この事件は香港というもの、およびそれを支配することをイギリス人に再考させる契機にもなったと思われる。ペストの流行が収まり、住民の帰還の趨勢も明瞭になったのち、「問題はかれらがわれわれを支配するのか、それともわれわれがかれらを支配するのか、ということである」という植民地医官の発言にたいして、『ホンコン・デイリー・プレス』紙がつぎのような論評を掲載した<sup>(121)</sup>。

この問題の答えはただひとつである。ここはイギリスの植民地であり、何が正しくて何が必要なのか、イギリスの考えにもとづいて統治がなされるべきである。ただし統治方法の基本原則は、支配される側の敵意が高揚するのを避け、かれらの信頼と協力を得ることにある。思慮に欠けた強制は、動物を飼いならず場合と同じく人を支配するうえで効果的ではない。香港政庁の今の課題は、中国人の住民を恐がらせたり敵意を生じさせたりすることなく、いかに必要な衛生改革を導入するかにある。そして今こそこの問題を解決し、改革の仕事に着手すべき時である。ペストの恐ろしさの影響がまだ生々しいあいだは、この仕事を将来まで持ち越すよりは、人々は既存の状態を変えることを受け入れ、それに黙って従いやすくだらう。香港を離れた人々がいま大勢戻りつつあり、ペストは実質上終った。そしてすぐにこの恐怖は完全に過去のものとなるだろう……。

香港の中国人を支配することを動物の飼育慣らしにたとえるなど、現在から見ればかなりあからさまな蔑視的表現となっているが、イギリスによる香港支配が、香港割譲から50年をへてもいまだに不安定だったことを認めるものである。この論評は戸別調査の問題点にからめて、さらに労働者の質にも言及する。

〔仕事のために家長が不在で、その妻がひとりで家にいるとき男性の調査官が戸別調査を行うのは賢明でなく、そのようなことをすれば〕きちんとした女性たち (*respectable females*) が全部この植民地から外へ出て行くことになるだろう。きちんとした中国人の女性はこの植民地ではけっして多くなかったが、近年わずかに増えている。道徳的また実質的な点において、そうした女性が増えることは、むしろ好ましい。きちんとした女性層が存在しないところでは、男性の状態はかならず墮落したものとなり、労働供給の質もそれに比例して信頼が置けなくなる。……この植民地に妻と家族とが住んでいれば、そうでない場合よりも、もっと落ち着いて働くだらう。

「きちんとした女性たち」とは、たとえば売春婦のような女性を念頭に置き、その対極を言うものだろう。直近の1891年5月の人口センサスでは、香港の人口構成は白人8,545人、中国人21万995人、*Coloured*（インド人をはじめとするアジア人と思われる）1901人、中国人のうち男性が14万9,694人、女性は6万1,301人であった<sup>(122)</sup>。この中国人男性のうち、香港で家族を持っていたものの割合は定かでないが、かなりの部分が香港ではなく故郷に足場を置いていたと思われる。ペスト騒動は、中国人住民の激しい行動パターンを露わにただけでなく、植民地支配の不安定さをも垣間見せるものとなった。

## お わ り に

---

1894年の香港では、ペストの症例が5月8日にはじめて公式に確認されたのち、12日から患者の隔離と、とくに感染地とみなされた中国人居住区で1軒ごとの戸別調査が始まった。調査で患者や死者が発見されれば患者は隔離され、死者は指定の埋葬地に送られ、家屋は消毒された。ところがはやくも20日前後には、中国人住民のさまざまな反発、具体的には戸別調査への妨害、騒動、流言、大量の香港脱出者などが明らかとなり、ペスト対策が転換を迫られる。そして隔離にかんしては、患者を伝統的な中国医にゆだね、広州方面やまた荔枝角病院への患者の移送を許すなど、当局はしだいに妥協していく。しかし、戸別調査と消毒はかえって強化し、汚染地区の封鎖と住民の強制退去などの段階に入る。

1894年のペスト騒動のなかで中国人の住民は、ペストへの恐怖、西洋人医師のもとに隔離されることへの恐怖、そして当局による強制的衛生措置という三重の災難にさらされたのだった。疫病への恐怖はいうまでもなく古くから存在し、また西洋人への恐怖はすくなくとも19世紀の中ごろには出現していた。そして1894年にいたって、香港でこれらふたつの恐怖がはじめて合体したといえよう。福士は、近代以降、西洋人の病院がそれなりに中国人に受け入れられてきたにもかかわらず、上海の租界当局の防疫措置のなかでは忌避されるのはなぜなのか、という重要な問題を提起している<sup>(123)</sup>。これは、自由意志で西洋医のもとを訪れるのではなく、強制的な隔離という措置によって、西洋人医師へのかねてからの恐怖感が増幅されたためではないかと考えられる。

こうした状況下で、感染地の封鎖と強制退去が行われるまえに、香港からはすでに8万から10万ともいわれる脱出者が出ていた。そして、6月にペストの流行が最盛期を迎えるなかで、労働者不足によって香港の経済が麻痺しはじめる。住民が脱出した理由を整理すると、①ペストから逃れる、②香港政庁の防疫措置から逃れる、③故郷で葬られたい、という3点を指摘することができる。そして、じつは①の感染地からの逃避は、古くから普通に見られる基本的な疫病対処法であり、また②の背後には西洋人医師にたいする恐怖感および、見ず知らずの男性が女性の部屋に入ることへの嫌悪感があったが、前者は前述のように19世紀のなかごろ以来の西洋人観そのものであり、後者および③は中国人社会の伝統に根ざした意識だった。つまり、ペストおよび、香港政庁の防疫措置にたいして、中国人住民たちは従来の行動パターンにしたがって反応した。中国に防疫上の制度を導入するということは、たんに隔離や消毒といった目に見える制度だけでなく、以上のような伝統的行動パターンに変更を迫るものでもあったといえよう。

一方、イギリス人の側にとって、この騒動はどのような意味を持ったのか。香港はイギリスの方針によって統治されるべき植民地である。しかし、中国人住民を必要以上に刺激し、その協力が得られなくなれば支配そのものが成り立たなくなることを、イギリス人は学ぶことになった<sup>(124)</sup>。この段階の香港は、多くの中国人労働者にとってしょせんは仮住まいの場所であり、なにか問題が起これば故郷へ逃げ帰ればよい、そのような不安定な場所だったのである。西洋人医師について悪いうわさが流布すれば、普通であれば教案のような暴動が起こる可能性が高い。実際、広州とその近辺では1894年のペスト流行のなかで小さな教案がいくつも発生している。しかし香港ではそれが見られなかった。これもまた、逃げ出せば問題が解決すると住民が考えていたことの左証となるだろう。

1894年以降も、香港ではペストが毎年のように発生し、患者や患者に接触した人の隔離、家屋の消毒などが継続される。ただしそののち、その制度は当局と中国人住民の歩み寄り

のなかで進展していったものと思われる。1895年のペストは激しいものではなかったが<sup>(125)</sup>、96年にはかなりの流行を見せ、1894年と同様の措置がとられただけでなく、ペストの流行地となったことが宣言された。そして、依然として住民が患者や死体を隠すことはあったものの、「公共衛生のために衛生措置の実施が絶対に必要なことを、1894年のときよりも住民が受け入れ、……金持の多くが妻や家族をこの植民地から移し、学校の大部分で出席が大きく減っているが、1894年のような住民の広範な脱出は起こっていない」という<sup>(126)</sup>。さらに1903年にいたると、非感染地で住民に街坊（Kai-fong）委員会を任命させ、消毒にかんしてはまずこの委員会に通知することになり、「衛生の事業を住民自身が積極的に担うよう促す」方針が現れた<sup>(127)</sup>。つまり、住民が当局の防疫措置をしだいに受け入れるとともに、行政の側も住民に防疫措置の一端を担わせようとした。こうした中国人の参加は、その後、エリートを中心とするものではあったが、まさに1910年の上海で試みられた方法であり、とりわけ戸別調査を男女の中国人医師が担当したことは重要な進展だった<sup>(128)</sup>。

さらに1903年の香港では、血液のサンプル調査から苦力の4.54パーセント、すなわち8,172人がペストの保菌者と見積もられ、当時のブレイク（Henry Arthur Blake）総督は、ペストを防ぐためには外部のみでなく、「われわれ内部の感染媒体を除去する」必要があり、そのためには住民の健康、さらには「人々の協力を確保」して「人間、家具、建物の清潔さ」にたえず注意を払うことが必要だとした<sup>(129)</sup>。ブレイク総督の時期（1898～1903年）には、チャドウィック（Osbert Chadwick）が『香港の衛生状態についての報告書』（1882年）につづいて1902年に『香港住宅事情報告書』をまとめ、関連法令も制定され、公衆衛生の改善が住宅問題と一体となって推進されることとなる。その契機のひとつとして、ブレイク総督の覚書にもあるように、ペスト対策があった<sup>(130)</sup>。

以上が、1894年の香港で、ペストに加え隔離への恐怖が引き金となって引き起こされた2ヵ月間におよぶ騒動の経緯および、その後の若干の動向である。

## 註

- (1) Hong Kong Museum of Medical Sciences Society, *Plague, SARS and the Story of Medicine in Hong Kong*, Hong Kong: Hong Kong University Press, 2006, p. 27.
- (2) *Hong Kong Blue Book for the year 1893*, Noronha & Co., 1894, M2. 本資料は Hong Kong Government Report Online (1842-1940) による。
- (3) 楊念群『再造“病人”：中西医衝突下の空間政治：1832-1985』中国人民大学出版社、2006年；曹樹基・李玉尚『鼠疫：戦争与平和——中国的環境与社会変遷（1230～1960）』山東画報出版社、2006年；張泰山『民国時期的伝染病与社会——以伝染病防治与公共衛生建設為中



- 心』社会科学文献出版社、2008年；余新忠『清代江南の瘟疫与社会：一項医療社会史的研究（修訂版）』北京師範大学出版社、2014年。
- (4) 飯島渉『ペストと近代中国——衛生の「制度化」と社会変容』研文出版、2000年；小浜正子『近代上海の公共性と国家』研文出版、2000年；福士由紀『近代上海と公衆衛生：防疫の都市社会史』御茶の水書房、2010年；帆刈浩之『越境する身体 of 社会史——華僑ネットワークにおける慈善と医療』風響社、2015年。
- (5) Jerome J. Platt, Maurice E. Jones, Arleen Kay Platt, *The Whitewash Brigade: The Hong Kong Plague 1894*, London: Dix Noonan Webb Ltd., 1998.
- (6) Elizabeth Sinn, *Power and Charity: A Chinese Merchant Elite in Colonial Hong Kong* (with a new preface), Hong Kong: Hong Kong University Press, 2003, chapter 6.
- (7) Pui-Tak Lee, "Colonialism versus Nationalism: The Plague of Hong Kong in 1894," *The Journal of Northeast Asian History*, vol.10 no.1, 2013.
- (8) 福士由紀「上海ペスト騒動（1910）——公衆衛生をめぐる都市の社会関係——」（政治経済学・経済史学会2011年度春季総合研究会）。
- (9) Rajnarayan Chandavarkar, "Plague panic and epidemic politics in India, 1896–1914," Terence Ranger and Paul Slack edited, *Economics and Ideas: Essays on the Historical Perception of Pestilence*, Cambridge: Cambridge University Press, 1992, pp. 203, 206, 208.
- (10) Sinn, *Power and Charity*, p. 167.
- (11) "The Colonial Surgeon's Report, with Returns on the Sanitary Condition of the Colony for the past Year," *Hong Kong Government Gazette*, vol.10 no.15, 9 April 1864, no.63. 本資料は Hong Kong Government Report Online (1842–1940) による。
- (12) "The Colonial Surgeon's Report, with Returns on the Sanitary Condition of the Colony for the Year 1867," *Hong Kong Government Gazette*, vol.14 no.8, 22 February 1868, no.25.
- (13) *Hong Kong Blue Book for the Year 1871*, no.60, Appendix I; John H. Robotham, "Report on the Small Pox Hospital at Stone Cutters Island. Government Notification," *Hong Kong Government Gazette*, vol.17 no.4, 28 January 1871, no.16.
- (14) "A Bill entitled Order and Cleanliness Amendment Ordinance," *Hong Kong Government Gazette*, vol.29 no.24, 26 May 1883, no.184. 本条例は、1887年に成立した。
- (15) "The lurching of the "Hygeia", *Hong Kong Daily Press*, 6 February 1891. 以下、本稿で使用する英字紙は、香港公共図書館の The Old Hong Kong Newspapers Collection による。Jerome J. Platt, Maurice E. Jones, Arleen Kay Platt, *The Whitewash Brigade: The Hong Kong Plague 1894*, Chapter 3の末尾にヒュギエイアの写真が掲載されている。
- (16) "Legislative Council," *Hong Kong Government Gazette*, vol.37 no.51, 14 November 1891, no.21.
- (17) "Report of the Colonial Surgeon for the year 1891," *Hong Kong Government Gazette*, vol.38 no.54, 19 November 1892, no.471.
- (18) 頼文・李永宸『嶺南瘟疫史』広東人民出版社、2004年、309, 341頁。
- (19) Carol Benedict, *Bubonic Plague in Nineteenth-Century China*, Stanford: Stanford University Press, 1996, pp. 65, 70–71, 140.
- (20) 以下、ペストと香港当局の対策については基本的に先行研究にもとづき、細部を補う必要がある場合のみ注をつける。
- (21) James A. Lowson, *Hong Kong: The Epidemic of Bubonic Plague in 1894, Medical Report*, Hong

- Kong: Noronha & Company, 1895, p. 1. この「行進」とは、文武廟で行われた祭礼のことを指していると思われる。“The “Man Mo” Festival,” *Hong Kong Telegraph*, 3 March 1894.
- (22) “Bye-laws made by the Sanitary Board, under the authority of Section 32 of “The Public Health Ordinance, 1887,” for the prevention and mitigation of the Epidemic, Endemic or Contagious Disease now affecting the Colony known as the Bubonic Plague,” *Hong Kong Government Gazette*, vol.40 no.24, 11 May 1894, no.175. 中国語訳は「香港治疫章程」『申報』（上海版）1894年5月22日。
- (23) “The lurching of the “Hygeia” ,” *Hong Kong Daily Press*, 6 February 1891.
- (24) “The Plague,” *Hong Kong Daily Press*, 14 May 1894.
- (25) Lowson, *Hong Kong: The Epidemic of Bubonic Plague in 1894*, p. 26.
- (26) *Hong Kong Daily Press*, 12 May 1894.
- (27) 『官報』第3264号、1894年5月19日、251頁。
- (28) 石神亨『ベスト』丸善、1899年、91頁。
- (29) Benedict, *Bubonic Plague in Nineteenth-Century China*, p. 147.
- (30) Lowson, *Hong Kong: The Epidemic of Bubonic Plague in 1894*, pp. 38, 41.
- (31) 羅汝蘭『鼠疫彙編』（光緒二十三（1897）年刊）広東科学技術出版社、2008年。
- (32) 志賀市子「一八九四年穗港地区的鼠疫流行与扶鸞的乱示」『香港中文大学道教文化研究中心通訊』第4期、2006年10月。<http://dao.crs.cuhk.edu.hk/ch/newsletter.html?expanddiv=4>
- (33) 李玉尚「近代中国的鼠疫应对機制——以雲南、広東和福建為例」『歴史研究』2002年第1期。
- (34) “Hong Kong Sanitary Board,” *Hong Kong Daily Press*, 11 May 1894.
- (35) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 14 May 1894.
- (36) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 15 May 1894.
- (37) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 21 May 1894.
- (38) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 21 May 1894.
- (39) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 21 May 1894.
- (40) Enclosure 1 in No.16, Education Department, Hong Kong, May 22, 1894, *Correspondence relative to the Outbreak of Bubonic Plague at Hong Kong, 1894, Parliamentary Paper* [C.7461], p. 12.
- (41) “Alleged singular and fatal mistake,” *Hong Kong Telegraph*, 23 May 1894.
- (42) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 27 June 1894.
- (43) “Hong Kong Sanitary Board. The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 25 May 1894.
- (44) “The Plague in Hong Kong,” *Hong Kong Telegraph*, 21 May 1894.
- (45) “The plague in Hong Kong,” *Hong Kong Telegraph*, 23 May 1894.
- (46) Enclosure 1 in No.20, Enclosure 4 in No.20, *Correspondence relative to the Outbreak of Bubonic Plague at Hong Kong, 1894, Parliamentary Paper* [C.7461], p. 15.
- (47) Report of the Mission Hospital at Swatow in Connection with the Presbyterian Church of England, under the care of P. B. Cousland, M. B., C. M. for 1894 (Presbyterian Church of England Missions Archives, 1847–1950, no.962).
- (48) 詳しくは、蒲豊彦「長江流域教案と“子ども殺し”」森時彦編『長江流域社会の歴史景観』京都大学人文科学研究所、2013年で整理した。
- (49) 北里柴三郎「ペスト病の原因取調に就て」『北里細菌及伝染病学雑纂』金原商店、1911

- 年、94-95頁。
- (50) “The Plague in Hong Kong,” *Hong Kong Daily Press*, 21 May 1894.
- (51) “Despatch to the Secretary of State,” *Hong Kong Government Gazette*, vol.40 no.47, 1 September 1894, no.319.
- (52) 青山胤道「香港に於ける「ペスト」調査の略報」『順天堂医事研究会雑誌』191号、1894年12月。病院の写真はPlatt, et al., *The Whitewash Brigade*, Chapter 3に掲載されている。
- (53) *Hong Kong Daily Press*, 22 May 1894.
- (54) “Meeting at the Tung Wah Hospital,” *Hong Kong Daily Press*, 21 May 1894.
- (55) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 22 May 1894.
- (56) “The plague in Hong Kong,” *Hong Kong Telegraph*, 21 May 1894.
- (57) “Attitude of the Chinese,” *Hong Kong Daily Press*, 23 May 1894.
- (58) Lowson, *Hong Kong: The Epidemic of Bubonic Plague in 1894*, p. 26.
- (59) “The Proclamation,” *Hong Kong Daily Press*, 23 May 1894.
- (60) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 21 May 1894.
- (61) No.2, Sir William Robinson to the Marquess of Ripon, June 20, 1894, *Further Correspondence relative to the Outbreak of Bubonic Plague at Hong Kong, 1894, Parliamentary Paper* [C.7545], p. 2.
- (62) “The plague. House-to-house Visitations,” *Hong Kong Telegraph*, 26 May 1894.
- (63) No.148. Hong Kong. Annual Report for 1894, 1896.2, *Parliamentary Paper* [C.7944], p. 7.
- (64) “The plague in Hong Kong,” *Hong Kong Telegraph*, 2 June 1894.
- (65) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 12 June 1894.
- (66) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 16 June 1894.
- (67) 「港疫続述」『申報』（上海版）1894年5月28日。
- (68) “The plague in Hong Kong,” *Hong Kong Telegraph*, 23 May 1894.
- (69) *Hong Kong Daily Press*, 22 May 1894.
- (70) *Hong Kong Daily Press*, 25 May 1894.
- (71) “The plague in Hong Kong,” *Hong Kong Telegraph*, 6 June 1894.
- (72) “The plague in Hong Kong,” *Hong Kong Telegraph*, 9 June 1894.
- (73) “Correspondence. The plague panic,” *Hong Kong Telegraph*, 7 June 1894.
- (74) No.2, Sir William Robinson to the Marquess of Ripon, June 20, 1894, *Further Correspondence relative to the Outbreak of Bubonic Plague at Hong Kong, 1894, Parliamentary Paper* [C.7545], p. 4.
- (75) No.148, Sir William Robinson to Mr. Chamberlain, July 10, 1895, *Hong Kong. Annual Report for 1894, Parliamentary Paper* [C.7944], p. 8.
- (76) Sinn, *Power and Charity*, p. 175.
- (77) “What the natives say,” *Hong Kong Daily Press*, 27 June 1894.
- (78) No.148, Sir William Robinson to Mr. Chamberlain, July 10, 1895, *Hong Kong. Annual Report for 1894, Parliamentary Paper* [C.7944], p. 8.
- (79) *Hong Kong Daily Press*, 14 June 1894.
- (80) No.2, Sir William Robinson to the Marquess of Ripon, June 20, 1894, *Further Correspondence relative to the Outbreak of Bubonic Plague at Hong Kong, 1894, Parliamentary Paper* [C.7545], pp. 2-3. これらは5月下旬のことと思われる。
- (81) 「黒死病続報」『東京朝日新聞』7月3日（朝刊）。

- (82) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 2 July 1894.
- (83) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 27 June 1894.
- (84) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 28 June 1894.
- (85) *Hong Kong Daily Press*, 3 July 1894; "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 7 July 1894; "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 9 July 1894.
- (86) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 30 June 1894.
- (87) *Hong Kong Daily Press*, 9 July 1894.
- (88) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 2 July 1894.
- (89) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 13 July 1894.
- (90) No.148, Sir William Robinson to Mr. Chamberlain, July 10, 1895, *Hong Kong. Annual Report for 1894, Parliamentary Paper* [C.7944], p. 8.
- (91) *Hong Kong Daily Press*, 15 June 1894.
- (92) *Hong Kong Daily Press*, 16 June 1894.
- (93) *Hong Kong Daily Press*, 3 July 1894.
- (94) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 4 July 1894.
- (95) 福土由紀「公衆衛生をめぐる都市の社会関係——二〇世紀はじめ上海——」高嶋修一、名武なつ紀編『都市の公共と非公共——20世紀の日本と東アジア』日本経済評論社、2013年、69頁。
- (96) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 21 June 1894.
- (97) "The plague in Canton," *Hong Kong Telegraph*, 2 June 1894.
- (98) 前掲、北里柴三郎「ペスト病の原因取調に就て」95頁。
- (99) "Correspondence. The plague panic," *Hong Kong Telegraph*, 7 June 1894.
- (100) "The plague. The Disease still Spreading," *Hong Kong Daily Press*, 25 May 1894.
- (101) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 5 June 1894. 神名と地名の漢字の比定は志賀市子氏の教示による。
- (102) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 21 June 1894.
- (103) 「事人事鬼辨」『申報』（上海版）1894年7月6日。
- (104) 疫病除けのために年越しをやり直す習俗については、路彩霞「年中度歳与晚清避疫——以光緒二十八年為主的考察」『史林』2008年5期を参照のこと。
- (105) 前掲、李玉尚「近代中国的鼠疫対応機制——以雲南、広東和福建為例」。
- (106) "Eighty-eighth annual report," *Baptist Missionary Magazine*, vol.82, no.7, 1902.7, p. 141. 本資料は Hathi Trust Digital Library による。
- (107) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 14 July 1894.
- (108) "The plague at Canton," *Hong Kong Daily Press*, 10 May 1894.
- (109) 「時疫未已」『申報』（上海版）1894年5月21日。
- (110) 「羊城疫勢」『申報』（上海版）1894年5月7日。
- (111) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 21 June 1894.
- (112) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 29 June 1894.
- (113) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 28 June 1894.
- (114) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 9 July 1894.
- (115) "The plague," *Hong Kong Daily Press*, 10 July 1894.

- (116) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 11 July 1894.
- (117) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 4 July 1894.
- (118) “Hong Kong sanitary board,” *Hong Kong Daily Press*, 6 July 1894.
- (119) “The plague,” *Hong Kong Daily Press*, 21 July 1894.
- (120) 伍連徳「中国之瘟疫与陪斯忒」『公共衛生月刊』1卷10期、1936年4月、3、9頁。
- (121) *Hong Kong Daily Press*, 13 July 1894.
- (122) *Hong Kong Blue Book for the year 1893*, M2.
- (123) 前掲、福士由紀「公衆衛生をめぐる都市の社会関係——二〇世紀はじめ上海——」77頁。
- (124) 1910年の上海ペストのさいにも、イギリス人側に同様の認識が現れたことについては、胡成「検疫、種族与租界政治——1910年上海鼠疫病例発現後の華洋衝突」『近代史研究』2007年4期、84頁を参照のこと。
- (125) No.178, Sir William Robinson to Mr. Chamberlain, July 30, 1896, *Hong Kong. Annual Report for 1895, Parliamentary Paper* [C.8279-2], p. 3.
- (126) No.6, Sir William Robinson to Mr. Chamberlain, May 6, 1896, *Hong Kong. Bubonic Plague, Parliamentary Paper* [C.8119], pp. 3–5.
- (127) Governor Sir H. A. Blake to Mr. Chamberlain, 21<sup>st</sup> August, 1903, No.25. *Hong Kong. Bubonic Plague. Memorandum on the Treatment of Patients in their own Homes and in Local Hospitals, Parliamentary Paper* [Cd.1821], pp. 6, 8.
- (128) 前掲、福士由紀「公衆衛生をめぐる都市の社会関係——二〇世紀はじめ上海——」78, 79頁。
- (129) Governor Sir H. A. Blake to Mr. Chamberlain, 21<sup>st</sup> August, 1903, No.25. *Hong Kong. Bubonic Plague. Memorandum on the Treatment of Patients in their own Homes and in Local Hospitals*, pp. 14, 8.
- (130) 泉田英雄「オズバート・チャドウィックの報告書から見た旧香港植民地の衛生改善事業（その3）」『日本建築学会計画系論文集』567号、2003年5月、183–184頁。

